



貝澤 美和子
Miwako
Kaizawa

<略歴>

1948年生まれ。平取町二風谷在住。
熊本県に生まれ、貝澤耕一氏との結婚を機に二風谷へ移住。
二風谷観光振興組合、二風谷民芸組合などを通じて、チタラペやサラニッなどの伝統工芸品の製作技術を伝承している。アイヌ文化実践上級講座やアドバイザー派遣事業（財団事業）により、平取町内の小学校にて刺繍講座やアイヌ伝統料理講習の講師を務めるなど、アイヌ文化の普及啓発や人材育成にも尽力している。

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ民芸品コンクール 最優秀賞（北海道知事賞 1995）
- ・北海道アイヌ伝統工芸品展 北海道教育委員会教育長賞（2009）
- ・工芸作品コンテスト 優秀賞（2018/2022）
- ・アイヌ文化奨励賞（2019）

「一番基本的なこと楽しんでやってほしい」

大学時代の北海道旅行でアイヌ文化に出会う
“やっぱり北海道行ってみたかった。憧れの地ですもん。熊本の人間だから北の国はすごく憧れるし、北海道なんてその頃は夢の外国みたいなもんですよね。平取に来たのは旅行案内本に載っていたから。写真もなくただ三行、格式的にアイヌ文化が残っている唯一の場所って書いてあった。魔法のようなその三行に、ここ行こうってなってさ。当時、（二風谷は）ユースホステルもないし宿もない。何も無いのは分かってたけど行けばなんとかなるだろうっていう感じでね。村の人にお願いして泊めていただいたのがユーカラ食堂をやっていた貝澤すみこさんっていうんだけど、二泊三日泊めていただいてね。そこ食堂だから友達と二人で手伝いながら。”

二度目の北海道旅行

“父親とうまくいかなかったから色々揉めて結局大学二年が終わってから中退。友達と旅に出ようっていうことになった。やっぱり一年前の北海道旅行の中では一番こが印象的だったから。もう一回このおばちゃんに会いたいと思ってきて。あのおばちゃんもね、どこの何とも知れないのに受け入れてくれたよね。おばちゃんから夏の観光シーズンになって忙しくなるからこの食堂を手伝ってって言われたから。全く家庭の家族の一員みたいな生活をさせてもらって。”

着物づくりを学ぶ

“私が三十代だった時、萱野れい子さんが着物の作り方を教えてくれるって、私をはじめその頃の若い人たちみんな冬の間に習ってたんですよ。縫い物とかに関しては萱野れい子さん。もう難しかったけど面白かったです。何やっても面白かったですね。萱野茂さんが若い人たちを集めているなんてここで踊ったり遠征に行ったりしてたんですよ。それにも誘われて行ったりして、だんだん興味が出て。”

教える立場になって思うこと

“その時やれる状況にある人がやって次の世代に伝えていくの。誰もやらなかったら伝わっていかないから、誰かがやって伝えてくれる人がいたらそれでいいかなと思います。私がこう習って見てコピーしているものもそれは誰かが考えたこと、じゃあ私がこの誰かになれないかなと思っちゃう。使命感ってそんな大げさもんじゃないけど、せつかく教えてもらったことはそのままにしないと誰にも伝わらないで終わっちゃう。”

わざ
技

Hands and Hearts
vol.9





<略歴>

1940年生まれ。札幌市在住。
和裁をしていた母親から手仕事を教わり、高校卒業後、洋裁学校に2年ほど通う。三上マリ子氏（アイヌ刺繍の保存・伝承に努めた服飾研究家）から着物や刺繍を学び、その後木彫やアイヌ語など、様々なアイヌ文化に積極的にかかわってきた。
現在は、北海道大学植物園収蔵資料の複製を行うなど多くの複製作業も手掛けており、伝統工芸複製助成事業や国立アイヌ民族博物館複製事業（財団事業）で講師を務めるなど後継者の育成に尽力している。

<受賞歴>

・工芸作品コンテスト 奨励賞 (2016/2019)、優秀賞 (2020)

加藤 シヅエ
Shizue
Kato



<略歴>

1948年生まれ。平取町二風谷在住。
大阪府に生まれ、19歳の時に北海道に移住。24歳から貝澤正氏に師事し木彫の修業を始め、1988年頃から独立して事業を営む。アイヌの伝統工芸、伝統文様に深くこだわり、数多くの美しい工芸品を現在に至るまで生み出し続け、アイヌ民芸品コンクールにて数多くの賞を受賞している。また、平取アイヌ協会の機動職業訓練事業、伝統工芸複製助成事業（財団事業）、平取イオル再生事業等で講師を務め、多くの若年層の人材育成に尽力している。

<受賞歴>

・北海道アイヌ民芸品コンクール 最優秀賞（北海道知事賞 1986）
優秀賞（1987）、特別賞（1996）、奨励賞（1997）
・アイヌ文化奨励賞（2022） ・工芸作品コンテスト 入選（2016）

洲崎 春男
Haruo
Suzuki

「作り続けること人と違うからこそ刺しゅうは楽しい」

子供のころの思い出

“やんちゃだったんだな結構。塀の上から飛び降りてきて遊んだもん。3才ぐらいから美園に住んでいる。周りは大体畑と田んぼ。水があれば田んぼになるし、なければ花を作っている。美園っていうところは本当に美しい。ちっちゃい時からいろんなもの作ってた。変な話だけど、小学校五年生ぐらいでセーターぐらい作ることができました。高校卒業していわゆる洋裁学校に2年ぐらい行ったかな。その頃からもう全部自分のものは自分で作る。今みたいにどっかに行けば吊るしてあるっていうようなものはないから、自分で着るためには自分で作らなかつたら着れない。”

アイヌの刺しゅうとの出会い

“私自身は木彫りをやっていたのね。その木彫りの教室でアイヌの人たちが「イタ」ってものがあって、木彫りの先生が教えてくれてたんだわ。その時ちょっと習っていて、次の教室の時まで作って持ってって見てもらっていた。その先生の関係で三上マリ子先生と知り合った。三上先生は他のことも覚えているから。毛皮の処理の仕方とか、そういうことも覚えていた人だから。着物や刺しゅうは三上先生から習ったもの。”

いろんな文化を学んできた原動力

“身近にあったってことじゃないかな。身近だったら変だけど、ちょっと足を伸ばせばそういうことを分かった人たちに会えるチャンスがあったってことだよ。アイヌ語だって藤村久和先生から習った。そうすると藤村先生と交流があった浦川タレばあちゃんとかそういう人たちとも会えた。亡くなった葛野辰次郎さんのところにも行ってますよ。そこにも泊めてもらったりしたんですけど、そうすると料理を作るから、そういう料理も覚える。アイヌ料理って出来上がったものは食べる機会あるよ、だけど作り方は分からないもんね。だから手伝わせてあげるっていう時は、もう喜んで手伝わせてもらう。”

昔の人が作った着物を参考に

“見ますよ、見ますっていうかねやっていると分かる時がある。きつこういう風に入ったのかな、これがあったから楽しかったのかなとか。だから古いものとは対話するっていう。”

指導者として考えていること

“面白がって欲しいなと思うのね、そうすれば物を見るでしょ。前にね北海道博物館で展示会させてもらったんです、発表の場で着物だとか前掛けとかか脚絆とかか手甲とか。お互いに声かけて作った。それをまたやれたらやりたいなって。今の子どもたちとやれば嬉しいなと思うけどね。”

「次に伝わるよう若い人に真似してもらいたい」

北海道に来たきっかけ

“私らがここに来た頃はミツバチ族だとかヒッピー族とかそういうのが多かったんです。夏休み以外でも何カ月間ここで住みつく人が多かったんです。そうやって木彫りを習う人が結構いたんです。（二風谷に）貝澤守さんの親、守幸さんっていう人がすごいものを色々彫っていたんですよ。そこで何十人も働いていた。弟子にお前入れていうことで一応入らせてもらって、2年ほどやらせてもらった。それから自分でやるようになって、最初は自分の彫ったやつを登別とかそういうところに売りに歩いたこともあるんです。10年間ほどずずらんメノコというレリーフを彫っていました。それでパブルはじけちゃって、ちょっと木彫りだけは食っていけなくなったので、この辺の石屋さん手伝ったり。”

再び木彫りはじめることに

“もういっぱいやってみるかなという意思が湧いてきて、本格的にやり始めたんですよ。一番好きなウロコ彫りは菅野茂さんに教えてもらったんですよ。それがきっかけになって、もっと上手に彫りたいという気持ちがあって。びっちりやるようになってきたんですよ。アイヌ語教室にも行ってたんですよ。アイヌ語もちょっと勉強しようかなと思って。模様のことを詳しく、コタンクルカムイの話だとかロシアからのつながりの話だとか、いろんな資料を見てそれで分かったんですよ。今と

なってはそれがすごい助けになっていたかもしれないね。”

木彫りで大切にしていること

“自分のオリジナルは作っても良いと思う。でも基本的なものはきちっとそこに入って欲しい。百年とか前の先輩たちは、最初三角でずつと彫るでしょ、その後二重線で彫るんですけど、その幅がびっちり全部同じ幅でくる。あれが素晴らしい。だからちゃんと収まる場所はきちっと収めてやっているあれがすごいです。綺麗にということはちゃんと収まる場所に収めるようにしていかなかったら、駄目なんですよ。あれがやっぱり、どうやって教えた方がいいのかなと思うんですけど。若い人らに真似してもなんでもいから続けてほしいと思う。最初は人の真似をして覚えていくものだから。だから教えて欲しい言ったらなんぼでも教えるし、型紙も見せるし。そうやって覚えていってほしいなど。そうせんかったら伝わっていかないですよ。死んでからじゃもう遅いんだから。だからどんどん真似してほしい。で分からんことがあったら聞いてもらいたい。一人でも多くの人を経験してほしい。どんどん若い人に教えていきたい。”